第４２回野菜需給情報等交換会の概要

１　日時

令和８年１０月２２日（木）１４：００～１６：００

２　場所

独立行政法人農畜産業振興機構　北館６階大会議室

３　出席者

別添のとおり

４　概要

（１）令和９年度予算概算要求額の概要、産地における一次加工に関する情報提供（議題１）

農林水産省から、資料１－１に沿って、令和９年度予算概算要求額の概要について説明があり、資料１－２に沿って、産地における一次加工に関する情報提供が行われた。

（２）需給に係る各業界の動向の情報提供（議題２）

・ 農畜産業振興機構から、資料２―１に沿って、令和８年（１月～９月）の野菜（キャベツ、はくさい、レタス）の需給・価格動向について説明を行った。

・ （会員）〔流通団体〕

９月以降から年末にかけての需給動向についてお話しする。９月は西日本、特に九州は雨が少なく、日照も多かったが、東日本、特に関東のおいては、中旬から下旬にかけて秋雨前線が停滞し、記録的な大雨となり、千葉、茨城の内陸部を中心に甚大な被害が出た。

このような状況から、９月は、長雨、曇天、低温の影響が広範囲の品目に及んでおり、レタス類、はくさい、ブロッコリー及びほうれんそう等中心に、生育停滞、病害が発生し、出荷が減少した。

これらの供給不足を背景に、９月中旬から下旬にかけて、引き合いが急速に強まった。葉茎菜類など露地野菜、また果菜類で相場が上昇した。一方、昨年不作だった北海道産中心のだいこん、ばれいしょ、玉ねぎは、比較的安定した入荷が続き、他の品目が高いということもあって、スーパーで特売品として取り扱われる等代替需要もあり、価格は堅調に推移した。一方、北海道産は、物量はあったものの、天候の乱れにより物流が滞

ったことでイタミが出たため、B 品が多くなったという印象がある。

９月上旬の野菜のキロ単価は 280 円で、高値で前年の 86%となった。中旬は、ほぼ前年並みの 300 円台となり、下旬は、前年を上回る 344 円となった。９月上旬から上げ気配が強まる動きであった。

10 月に入ると、晴れの日が続き、生育停滞していた関東、東北の葉物野菜、果菜類が、回復基調になっている。しかし、これまでの長雨と日照不足の影響が大きく、はくさい、キャベツ、レタスは巻きが緩く、小玉傾向で箱数が伸びてない状況である。

一方、キャベツは、群馬県の天候が今一つであったことから、それほど大きな被害はなかったものの、単価が高く、中央集約型となり、入荷量は 10 月上旬の時点で前年の 115%となっている。数量が多く入ってはいるが、単価の方が 184 円で前年の 180%となっており、入荷増単価高の状況となっている。レタスについても、長野県の天候が今一つであり、茨城の出足も鈍かったため、数量が 8 割程度ではあるものの、単価は 368 円で前年の 220%となっている。入荷が２割減に対して上げ幅が 2 倍以上となっており、非常に顕著な単価が出ている。

ばれいしょ、玉ねぎについては、順調に入荷されており、野菜全体の入荷量は、前年同期の 1 割増となった。しかし、キャベツ、レタスの単価が高く、10 月の上旬の時点における東京市場でのキロ単価は 348 円で、前年の 110%となり、今年に入って最高値となった。10 月のこの時点で、瞬間的ではるものの、値段が上がっている状況である。

中旬以降、高値反動の動きが見られ、他の回復してきた野菜があることから、値段は落ち着いてきており、上旬の価格を下回るとみている。10 月、11 月に入ると、重量野菜の主力産地は関東産に切り替わっていくが、長引く曇天のため、播種が遅れ、加えて初期生育不良も見られており、出揃い時期が遅くなっている。関東産の重量野菜の品薄感は年末まで続く見込みである。西南暖地のキャベツ、レタスについては、出揃いはやや遅れる見込みではあるものの、関東産よりも状況は良いとのことであり、増量してくると品薄感、逼迫感が徐々に落ち着いてくるとみている。

果菜類は現在、東北、関東産が主力であるが、産地は西日本へ移っていくところである。出揃いは若干遅れる予想ではあるが、樹勢に大きな問題はないということであり、平年並みに天候が推移すれば、それほど不足感なく数量は出てくる見込みである。

引き続き、北海道のばれいしょ、玉ねぎは、潤沢に入荷されるとみており、野菜全体の不足感が弱まれば、これまでの高値反動で、相場の下げ気配が強まってくるとみているものの、関東産の重量野菜は伸びきらない

という見方であり、11 月、12 月に関しても、野菜総体の相場は、平年並みを上回るものと見ている。9-11 月は、直近３年において今までにない高値が続いており、平年並みであっても、250 円以上、300 円近い価格になるのではないか。

テレビでは、量販店が、高い野菜の代わりにさといもを勧めていたが、さといもは関東産中心で、作柄は問題なく順調に入ってきている。同じイモ類のかんしょは、千葉、茨城が中心であり、貯蔵前のものに関しては品質的に問題ないものの、年末から年明けの貯蔵ものになってくると、天候不順や圃場冠水の影響もあって、卸売会社の方からは「品質的に懸念が残る」ということを聞いている。

関東産の重量野菜が少ないという見込みではあるが、同じ千葉でもだいこんやキャベツが出てくるのは沿岸部であり、大雨の被害が大きかったのは内陸側であることから、影響は少ないと見込みでおり、極端な高値が出ることはないものと考えている。数量的には潤沢ではないが、西南暖地産のキャベツの数量が出揃ってくれば、平年を上回る価格であっても現状の品薄感も薄れてこよう。

・ 〔生産者団体〕から、資料２－２に沿って、秋冬野菜の出荷計画の見込みについて説明があった。

・ （会員）〔食品団体〕

先日、茨城県に行ってきたところだが、年越しの頭を縛るはくさいについては、全くものがないようだ。

育苗はしたが、９月、10 月に定植できず、苗を捨てたという話を聞いたが、生産者とすれば一番辛いことだと思う。定植できなかったことで、当然 12 月、 1 月の出荷に大きな影響が出るだろうと聞いている。

実際、茨城県の大口の法人の代表者何人かと話したところ、キャベツは半作、はくさいもよくて半作とのことであったが、「これからどれだけ巻きがちゃんとしてくるかは分からない」と話していた。淡路島産が出るまで時間があるため、年明けに鍋需要に応えるはくさいがあるのか、疑問である。

カット野菜については、大手加工業者がテレビではっきりと値上げを宣言した。私はあの報道を見て、本当に嬉しかった。業界として、多くの意見を集約し、統一見解として、量販店に値上げ申請をしに行くと、必ず「お宅だけだよ、値上げを言ってきたのは」と言われてきた。そういう環境において、最初に取り組んだことは、100 グラムであったものを 80 グラムに減らす等、量目を減らすことであった。キャベツの千切りでは、ビッグパックが動いており、大手加工業者で一番内容量が多い商品は 410g であっ

たと思うが、量目を減らしている。そういう形でまず動き、その後に価格を上げた。

このような行動を起こした時に、注文どおりに出荷できず、量販店の棚がなくなることが必ずあった。今までは、そういった状況であえて出荷する生産者、会社があったが、今は、あえて赤字を覚悟で出せる会社はないように思う。例えば、1 週間、2 週間で何億円の損失出すと、青果の業界でその損失を埋めることはできなくなっており、そのことを多くの人が実感している。そのため、値上げに動く人はいなかった。その状況下で、売り上げ的トップである大手加工業者が牽引し、値上げを宣言したことは良かったと思っている。

本日は、農林水産省が参加しているので、先日、茨城県の大口の法人の社長と話をした際、このような状況で、どのような対策を望むか聞いたところ、「無利息、無担保で運転資金を出してほしい」と切に言っていた。年末に、資材・肥料等の支払いがあるが、支払えずに夜逃げする農家が出ることを心配していた。全ての農家が、資金繰りが得意なわけではない。資金不足は現実に生じることであり、支援を考えていただきたい。

（３）こと京都の取り組みの講演（議題３）

こと京都株式会社が、資料３に沿って、事業戦略、高温対策及び災害対策等について講演した。

（４）意見交換

（１）から（３）までの情報提供を受け、以下のとおり各出席者が意見を発信した。

（座長代理）

10 月時点で野菜のキロ単価が最高値を記録しているということに表れているように、野菜の供給状況が非常に厳しい状況であることを確認する必要があると思う。例えば、茨城県のキャベツ、はくさいなどは、今後も出荷数量減少の影響が続き、年明けまで影響してくる品目も多々あるということであった。こうした状況の中で、カット野菜について、スーパーが求める「お得なカット野菜」の注文が入った際、カットメーカーや産地が無理をして対応することによって相場が上がり、なおかつ赤字を出すということでは、とても持続可能な生産供給システムにはならないと思う。大手加工業者が値上げを宣言したように、そのダイナミックプライス制、つまりその原料価格が上昇している中で、カット野菜の価格が上がらないというのは、これは無理なことだということを、小売りの方々、それから消費者の方々にも理

解していただくこと必要になっている。

異常気象が頻発する中で、農林水産省から説明があったように、安定供給に対する貯蔵の活用、一次加工、冷凍等これらを組み合わせた対策の中で、実需者が必要とする形態での供給と収入安定の仕組みをみんなで連携して作っていくことが、ますます重要であると認識した。

（会員）〔小売団体〕

私たちは町の八百屋さんで組織する組合の連合会で、BtoB で学校給食、町のラーメン屋、それから老人ホーム施設等々に食材を納入している。先ほど価格の話があったが、10 月の初め、はくさい一玉 700 円、 800 円となった。そういった中で、東京に限定して説明すると学校給食に食材を納入している。東京 23 区は自校方式で、それぞれの学校で調理をしており、学校給食の栄養士の方と私たちが話合いをして、やりくりしているという実態がある。価格高騰したものは避け、違うもので代替する、ということをやっている。

組合員が卸売市場で仕入れて、卸売業者や仲卸業者に支払う買受代金を組合で代払いをしている。組合員には量販店もいるが、「３日目払いの代払い」となると、1 日 100 万買う組合員の代払いは、野菜の価格が高騰して３倍になれば 300 万円となる。定時・定量・定価格に収めることを基本としてはいるものの、価格が 3 倍上がると資金繰りの面で相当大変になる。

（会員）〔消費者団体〕

気象条件、災害級の大雨の発生は、もちろんよくわかっているところであるが、消費者としては野菜を買いたくても本当に高い。特に葉物野菜で、最近、レタスが一玉 500 円前後のことがあったが、レタスが 1/4 で売られていたところを見た時には、「これはちょっと普通じゃないな」という感覚を持った。生産現場においても、コストの上昇等いろいろなご苦労があって、それでも美味しくて品質の高いものを供給するためにご尽力をいただいていることは、とてもよく分かっている。消費者としては、いくら高くても欲しければ受け入れるしかないという状況であり、少しでも手に入れやすいもの、買いやすいものを求めて、安いお店を探したり、カット野菜、ミックス野菜を代用したりということが、それぞれの家庭の状況に応じてあると思う。

しかし、そのカット野菜について、値段は変わらないものの、知らないうちに「内容量が少し減っているかな」と思うことがある。野菜だけではないが、例えばアソートのお菓子、ウインナーソーセージ等いろいろな食品に共

通することではあるが、そこは公明正大に、情報提供をしっかりしていただきたいと思っている。

その野菜に関しては、供給が過剰になった時には、需給調整が実施されていることをよくわかっているが、逆に供給不足時には、消費者の要求の充足、健康維持、家計負担の軽減という観点から、どのような対策が講じられているのか、情報が届いていない。本当に高い、少ないと嘆くしかない。スーパーや小売店などの店頭から担当者がテレビを通して発信している情報も、消費者にとっては貴重なお役立ち情報であると思っている。

例えば、産地の分散、代替地の活用で供給不足が補えているのか、実際に気候変動による異常気象への対策としてどのような生産技術の導入が進められているのか、もう少し出荷量や価格の見通しについても、消費者に分かりやすく定期的な情報提供をお願いしたいと思っている。なおかつ、規格外品、冷凍野菜、加工野菜、そういったものを十分に流通させていただいて、食品ロスの削減と供給の確保を進めて欲しいと思う。

また一時的な価格の上昇があった時には、代替野菜が選択できるような情報を提供していただき、選択肢を与えてほしいと思っている。

（会員）〔消費者団体〕

消費者としては、お米もずっと値上がりしていることに加え、お肉もすべてが値上がりしている。実感としては、同じ金額で買い物をしても、「買うことができる量が半分になったかな」と思っていたところが、1/3 になってしまったような感覚がある。すべての食料に、肥料・資材費、人件費、光熱費がかかっていることを十分分かっている。それでも、私たちも食べていかなくてはいけないので、スーパーでは高いものを目にしないようにして、自分の基準の値段のものがないかということを探すことに、時間がかかるなあと思っている。こういう状況では、やはり忙しい若い世代の方々は食料を確保できているのか、生活に困ってらっしゃる方も多くなっている中で、子どもたちの栄養がしっかりと確保されているのか、とかいうことも大変心配している。

野菜は天候に大きく影響される食材ではあるが、保存の仕方等いろいろな工夫があるということも分かった。一次加工の玉ねぎの剥いたものなどは、実需者用ということであったが、一般消費者に対してもぜひ売っていただきたいと考えた。玉ねぎを剥くこともなかなか手間がかかることだ。一個でも剥いてあれば、素早い食事の支度ができるわけで、大変助かると思っている。

そういう意味で、食料システム法も成立したこともあり、しっかりと消費

者にも、出荷量、価格に関することについて分かりやすく伝えていただきたいと思う。

SNS 等で間違った情報が出るような状況でもあるため、誤情報に対し、「これは間違っていますよ」ということも含めて、正しい情報ができる限り、消費者に伝わるようにしていただきたいと思う。

消費者は、毎日三度の食事のことで、かなり切実な日々となっていることを考えていただき、生産者から、企業、団体のすべての情報共有、理解が進むことを願っている。

（会員）〔生産者団体〕

価格は高い時と安い時があり、今年の動向で見ると、少し二極化している状況がある。北海道のものは割とよく収穫されている一方で、葉物等が高くなっているという状況だ。供給量が少なく、価格が高いものをどう対策するかということは、非常に難しい。

一般論になるかと思うが、日本列島は広く、全国の中で豊凶がそれぞれあり、いろいろな情報を組み合わせて状況を判断する必要がある。

天候状況も、 ９月は関東で非常に雨が多かったが、全国で見るとさまざまな状況があった。10 月は、天候の条件等もさらに変わってきており、今後の秋冬の展開もさまざまな意見がある。こうした状況の変化も踏まえ、そこを見極めて、取り組んでいくことになろうかと思っている。

（会員）〔食品団体〕

先ほど規格外品の活用の意見を聞いて、ふと思いつくことがあった。

直近の話であるが、長野県のはくさいは 15 キロで六玉、１個の重量が 2.5 キロから 3 キロぐらいが標準である。今年は、そこまで重量が乗らず、急遽全農長野県本部が八玉 15 キロで出荷をしてきた。１個が 1.5 キロぐらいあることになるが、その 1.5 キロにも満たないような規格が出てきた。

小売りの現場で言うと、きれいなもので決められた重量がないと売れないという現実がある。

今年、例えば茨城県の小松菜で、若干冠水したものと思われるが、水分を吸い過ぎて軸が溶けてしまっているものが何回も出た。私は捨てる必要はないと思っているが、その瞬間、起きていることついて、どういう形で消費者にお伝えしたらよいかと悩むことがある。

規格を急遽緩めるというよりは、完成型の綺麗なものしか買わないという通常のパターンについて、卸しの方含めて、規格の部分だけにこだわらずに出荷できるように何か考えた方がよいのではないかと思っている。

これからは、しっかり巻いた白菜はほとんど出ないと思う。そうなった時、巻きが緩くてもはくさいとしては十分使えることを理解してほしいのと思っている。

大根についても、高温干ばつ傾向から一気に降雨があったため、青首の頭のところに、割れや変色が多く出る。それを一本の大根で売っていく、もしくは 1/2 に切って売っている時に、どうしてもイタミを指摘されて外されるパターンがある。しかし、何の問題もない。こういう時にどういう表現で伝えればよいのか、いつも考える。

非常に良いご意見をいただいたので、工夫をして、そういったものをどのように消費者に伝えて売っていくか、ということを考えていきたい。

（会員）〔消費者団体〕

近年の物価高に加え、イラン情勢による燃油高に伴い、肥料価格も上がっていると思う。生産いただく作物が高くなっている状況は、やむを得ないのではないかと思っており、これまで通りの価格で野菜が買えるとは思わない方がいいのだろう、と個人的に消費者として感じている。内容量が減ったものや、部分カットされた野菜も活用し購入することになっていくかと思う。

しかし、異常気象、温暖化している状況において、こと京都様が北海道、岩手で生産されているように、どこで生産するかというところも考えていただかなければいけない。また、生産されている方にも、何が自分の土地に適しているのかを再考、取り組んでいただく必要があると感じている。

（５）緊急需給調整事業の実施状況等の情報提供（議題４）

農畜産業振興機構から、資料４に沿って、令和８年度緊急需給調整事業の実施状況等について説明を行った。

以上

（別添）

出席会員

生産者団体	全国農業協同組合中央会
	全国農業協同組合連合会
	（公社）日本農業法人協会
消費者団体	（一社）全国消費者団体連絡会
	（一財）消費科学センター
	主婦連合会
	全国女性団体連絡協議会
消費拡大団体	NPO青果物健康推進協会
	（一社）ファイブ・ア・デイ協会
流通団体	（一社）全国中央市場青果卸売協会
	（一社）全国青果卸売市場協会
	全国青果卸売協同組合連合会
食品団体	（一社）日本惣菜協会
	（一財）食品産業センター
	全日本漬物協同組合連合会
	野菜流通カット協議会
小売団体	全国青果物商業協同組合連合会
学識経験者等	藤島廣二　東京農業大学名誉教授・東京聖栄大学学長付相談役（座長）
	小林茂典　高知大学次世代地域創造センター土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業特任教授（座長代理）
行政機関	農林水産省